
I S インフィニット・ストラトス マキナを操りし者

バン・レオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス

マキナを操りし者

【Nコード】

N6937Q

【作者名】

バン・レオン

【あらすじ】

運悪く、15歳で死んだ、俺が神（殺した張本人）の力で生き返ったが……！

そこは、女尊男卑の社会 《インフィニット・ストラトス》の世界だった。

第1話（前書き）

小説とマンガを読んで書いてみたくなりました。
よろしく願います。

第1話

「…どこだ、ここ!？」

(確か、本屋に行つて、マンガを買つて帰ろうと出入り口を出た…
…先が思い出せねー!?)

回りを見回すとそこは、地平線まで続く草原?だった。

「ヤッホー、元気か?」

「…誰だ、あんた?」

後から声がしたので振り向いたら、石神邦生が立っていたのだ。

「…何故にジユタの石神社長!？」

「この格好はね、君の記憶から良さそうなのを、見繕ったからだよ」

「俺の記憶?…てか、ここはどこで?、あんたは誰だ?」

「ここは、今の君みたいな存在が来る所で、私は、まゝあ 案内人

だと思ってくれないか」

「今の俺だと？どういう事だ！？」

「君は、死んだ」

「…はあ？ 死んだ、俺が！？」

俺は、案内人の胸ぐらを掴んで、締め上げた。

「詳しくは、言えないけど死んだ事は、事実だよ」

「…嘘だろ…死んだって」

胸ぐらを掴む力を緩めた。

「そんな落ち込み中の君にプレゼントがあるよ」

「プレゼントだと？」

「他の世界に転生する権利といくつかの特典をプレゼントするよ」
「両手を広げて石神が言った。」

第2話

「…聞くんが、転生先の世界は、どんな所だ？」

「（切り替えが早いね〜）え〜とインフィニット・ストラトスの世界だね」
手に持っていた書類をめくって言った。

「…それって、女尊敬男卑の世界だと思うが…」

「大丈夫 大丈夫、君自身ISに元から乗れるから」

「…元から乗れる」 俺は、石神の笑顔がうざく思えた。

「…じゃあ、機体をヴァーダントにしてくれ、ちなみに展開したら『全身装甲』でな。それと各種マキナの装備を頼む」

「OK あとは〜」

手元にあるパソコン？に打っていた。

「装備開発に必要な知識や驚異的な身体能力…だな」
目をつぶりながら言った。

「装備開発？」

石神から疑問の声が聞こえた。

「自分で装備は、造りたいからな」

「あゝ解ったよ、あとは？」

「会社を立ち上げる為の資金位だな」

「資金…と 終りだねそれじゃあね」

石神は、パソコンから顔を上げた。

「んなつ！？」

石神の後から

コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ

長さ10m

は、ありそうなバットが出てきた。

「…………このバットは、なんだ」

「これで、君を飛ばすんだよ」

憎たらしい笑顔でハットを構えた。

「…俺を殴り殺すか」

「ハハハ その点については、安全だから大丈夫だよ。

それじゃあねえ」 石神は、バットをフルスイングした。

「イヤアー！！」 打たれた俺は、悲鳴をあげながら星になった。

「行っただね、さて次 のは」

パソコンに目を目を向けた案内人は、困った顔をした。

「ハハハ 失敗 失敗まさかヴァーダントだけじゃなく、全マキ
ナをあげちゃたよ アハハハ」

「まあ、平気でしょ」

第3話

某国上空8000m

「こちら、ヴァーダント 目標到達まで50秒」

全部を黒で統一した機体は、密かに目標の元に迫っていた。

「どう？ 超高速・高高度装備の調子は？」

通信機からの声は、若い女性の声だ

「今の所は、異常ありませんよ 東さん」

「よしよし そのまま『亡国機業』の仮拠点を潰してね」

「了解（何時もながら、戦闘前の空気じゃ無いな）」

ピピピピ

レーダーが亡国機業の拠点を見つけたのだ

「（それじゃ仕事としますか）」

超高速・高高度装備が消えて奇襲型殲滅装備に変えた。

「ハアアアア!」 勢いが付いたまま落下を開始した。

敵拠点

ビービー

警報が響きはなし

「うるさいな」

突入して5分が過ぎようとしていた。

「（何ぜにここまで警備が厳重なんだ？）」

歩いて来た通路を見ると幾つ物の隔壁や無人機、機関銃等がスクラップになっていた。

「まさか略奪機が置いてあるわけ…無いよな」

今の所は、どこの国もISが奪われたと言う話は、無い。

「んっ これは」

手前にあつた、扉を開けて中に入ると一台のスーパーコンピュータが動いていた。

「スパコン?...何をやってたんだ？」
スパコンのデータを全てコピーした。

「（データは、東さんに頼むとして...ここは、跡形もなく消しますか）」

ガキッ ガキッ

「動くな!!」
扉に向かってサブマシンガンに向けた。

「シンニユシャ ハイジヨ ハイジヨ」
両腕が異常に長く、今まで見たことの無い機体が歩いていた。

「動くな、撃つぞ!!」（見たことの無い機体だな、新型か）」

「ハイジヨ」
両腕からビームを打ち出した。

「ちっ!!」
打ち出された、ビームは、拡散したが全てを最小限の動きでかわした。

「食らえー!!」

サブマシンガンの雨を敵に撃ち続けたが、両腕の厚い装甲に阻まれた。

「（固い なら）」

サブマシンガンを捨てて、レールガンを抱え込む様に構え撃った。

ガギャ

相手の両腕を貫通し装甲までも粉々に破壊した。

「…やはり、無人機か」

破損した箇所からは、人が乗っていない事が確認できた。

「（亡国機業めいつの間にISの無人機を）」

《ピーピー》

IS 二機 接近中》

「時間をかけすぎたな」

爆弾を仕掛けて、急いで逃げ出した。

「東さん、聞こえてますか」

逃げ出した後、海上のある貨物船に向かっている最中だ。

「はあゝい どうしたの？」

「亡国機業の拠点は、破壊しましたが…ISを所持していました」

「んゝ どかつのを盗んだんじゃないゝ」

「それとスパコンのデータをコピーしたので解析お願いします」
貨物船の上甲板のハッチを開けて内部に入った。

「OKまっかせといてゝ あっ、それとちーちゃんが学園に
来いだって」

「わかりました。日本に着いたら、自分から連絡します」

「よしよし それじゃ頑張つてゝ」
通信が切れた。

着地するとISを腕時計状の待機状態にした。

「久しぶりに会えるな」

第4話

「久しぶりの日本だな」

白のワイシャツ、黒のネクタイ、黒のスーツ、右手にスーツケースで空港の出入り口を出た俺を迎えたのは

「久しぶりだな、早瀬」

表れたのは、黒のスーツタイにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目

「何でここに居るんですか、千冬さん」

隣人であり善き友達の姉、織斑 千冬である。

「疲れてるだろ、乗ってけ」

指差した方向に黒塗りの車が停まっていた。

「はい、それより誰から聞いたんです？」
助席に座った。

「東から連絡が来てな」

「東さんですか、じゃあ『百式』と『紅椿』の事ですか」

「？『百式』は、私自身が頼んだ事だ。だが、『紅椿』とは、何だ」

「（紅椿の事は、まだ教えて無いのか）今、開発者のISです」

「…又、世界を混乱させるなよ」

目を細めて見てきた。

「アハハハ それより、一夏の唐変木は、相変わらずですか？」

「自分で確かめてみる」

「そうですね、それより『亡国機業』の事は、一夏に言わなくて良いんですか」

「…まだ、その時では無い」

「…そうですね、そろそろですね」車がとある高層ビルの正面ゲート前に停まった。

「来賓の方ですか」　メガネをかけた警備員（特殊部隊）が近づいて来た。

「特務室室長の早瀬だ」

ポッケから出した手帳を見せた。

「どうぞ、行ってください」

メガネで手帳を確認し終わったらゲートが開いた。

車は、少し遅めのスピードで出た。

「その手帳とメガネだな、手帳にICチップが埋め込んで、メガネが顔認証システムか」

「そのとおり、メガネがICチップを読み取り、顔認証システムで見分けます。　今ベストヒットの商品です（極秘研究機関等が納品先）」

車は、地下駐車場に入った。

車から降りた俺達は、エレベーターに乗った。

「東さん目当てですよね？」

「そうだ、あいつに聞きたい事があるからな」

「なら、特務室ですね」

「50階」のボタンを押した。

特務室

コン コン

「束さん、居ますか？」

扉を叩いて入ると至るところにケーブルが散乱していた。

「んっ ゆーくん!!」ウサ耳でメイド服の束が抱き着いた。

「遅かったね、怪我な「離れないか、束」ちーちゃん!!」 千冬
さんに飛びかかった束さんは、片手で顔を掴んだ。

「抱き着くな、束」

「相変わらず、容赦無いな」

「そんな事より、亡国機業の事だ」

「亡国機業？それなら、大丈夫。ゆーくんが潰しているよ？」

「束さんあいつらは、ゴキブリ並の生命力ですよ、それよりも、ス

パソコンの中身は？」

「スパコンだど？」千冬さんの目付きが変わった。

「えーと、拠点を潰したら、出てきたので」

「はいっ、中身だよ」

壁に掛けてあるメインディスプレイに写し出された。

「これは」

写し出されたのは、無人ISの起動実験記録や各国が開発中の第三世代型がこと細かに書いてあった。

「そう言えば、イギリスのBT二号機『サイレント・ゼフィルス』が盗まれたな」

「そうになると、他の国もですね」

「ハア… 早瀬！！」 ため息を吐いたと思ったら、いきなり名前を呼ばれた。

「はい!!」

「IS学園に絶対に入学しろ」

「…元々そのつもりです、織斑先生」

「入学式は、1週間後だ。遅れるな
そう言っつて、帰った。」

千冬が帰ったあと

「…百式の最終調節を済ませますか、束さん」

「そっだね、ゆーくん!!」

何時もの様に時が過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6937q/>

I S インフィニット・ストラトス マキナを操りし者

2011年2月24日12時44分発行